

大津栄一郎著

英語の感覚

(下)



岩波新書

279



大津栄一郎著

英語の感覚

岩波新書

大津栄一郎

1931年長崎県に生まれる

1954年東京大学教養学部教養学科卒業

専攻—英米文学

現在—明治学院大学文学部教授

訳書—「オー・ヘンリー傑作選」(岩波文庫)

「ヘンリー・ジェイムズ短篇集」(同上)

A. ケイジン「ニューヨークのユダヤ人

たち(I, II)」(共訳, 岩波現代選書)

V. ナボコフ「賜物」(福武文庫)ほか

英語の感覚(下)

定価はカバーに表示してあります 岩波新書(新赤版)279

1993年5月20日 第1刷発行

著者 おおつ えいいちろう
大津栄一郎

発行者 安江良介

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
新書編集部 03-5210-4054

印刷・精興社 カバー・半七印刷 製本・永井製本

© Eiichirō Ootsu 1993

ISBN 4-00-430279-X

Printed in Japan

目 次

第四部 ものごとを動的にとらえる 1

1 核は動詞——他動詞で考えれば..... 1

事象はすべてなにかのせいである／英語の動
詞は簡明／動詞の型／英訳は他動詞で／自動
詞・他動詞

2 動かすのか、動かされるのか ——他動詞の用法と能動態・受動態..... 15

他動詞を分類すれば／ふたつの態——能動と
受動／by は動かすもの／have と get

3 動詞を活かす——分詞，不定詞，動名詞 53

動詞の形容詞化——分詞／分詞の活用——進
行形，受動形，完了形／動詞の名詞化——不
定詞，動名詞／不定詞と to 不定詞／動名
詞／不定詞，to 不定詞，動名詞の違い／動名
詞と to 不定詞の違い／不定詞と to 不定詞の
違い／助動詞と不定詞，to 不定詞／動詞の形
容詞用法／動詞の副詞用法／動詞の名詞用法

第五部 言葉を組み合わせる 99

1 単語から句へ，節へ——基本文型の発展 99

微妙な意味は，単語の組み合わせから／基本

文型をいかに発展させるか／句と節／形容詞
節／副詞節／名詞節／that について／比較
の表現

2 時間差表現のコツ

——形容詞、副詞の便利な用法 150

英語の形容詞は簡明／形容詞は添付の感覚
で／形容詞を時間的に組み合わせる／副詞も
時間的に組み合わせる／少し変わった形容詞、
副詞の用法

3 英語は推理力——in と on の用法 168

論理的に推理する／推理が難しいのは前置
詞／A in B／副詞としての in／A on B／副
詞としての on

第六部 表現の姿勢 211

1 相手を楽しませる——会話の要諦 211

ユーモア／アイロニー／クリシェ

2 日本語と英語

——「のどかな春」の英訳は..... 224

翻訳不可能な大和言葉／英語はエンドレス

あ と が き

上巻 目 次

まえがき——暗記と反復練習を超えて

第一部 見えるもの、見えないもの

- 1 youは「あなた」か——人称代名詞の場合
- 2 「それ」とは何か——itの正体
- 3 見えないものを見る——名詞の場合
- 4 神と人間と動物——冠詞の場合
- 5 「幸福に」か「幸福そうに」か
——日本語は見える範囲で

第二部 動かない自己、動く自己

- 1 自分と宇宙のあいだ——遠心性と求心性
- 2 流れつづける時間——静止、進行、完了の相
- 3 動かない基点——時制の一致、話法

第三部 存在界のことか、非存在界のことか

第四部 ものごとを動的にとらえる

1 核は動詞——他動詞で考えれば……

英語には 10 の時間表現の方式があり、そして「法」によって表現領域と表現方式が厳密に定められているということを上巻で見たが、それは、動詞を活用するチャンネルが英語には多数あるということを意味する。それに対して日本語には進行相や完了相の明確な表現方式はなく、法という構造もなかった。チャンネルの数で英語は日本語をはるかに凌駕しているのである。そう考えると、英語の構造の核は動詞にあることが分かる。それは、英語国人がどんなに事象を動的にとらえているかの証拠でもある。

事象はすべてなにかのせいである 10 年以上前からあちこちの街角で「世界人類が平和でありますように」というポスターともお札ともつかぬものが貼ってあるのを見かけるようになった。それを読むたびに、日本語の特徴がよく現われた文章だと思わざるをえなかった。われわれ日本人は、なにかを祈願するとき祈願する相手をあまり意識しないように思うが、この文でも祈る相手がだれかは分からない。キリスト教の神か、アラーの神か、

仏か、神社の神か、だれか分からない。いや、分からないからこそ、この文を街角に貼り出す意味も少しはあるのかもしれない。祈る相手がはっきり特定されていたら、同志の者の間でしか通用しないわけで、街頭で不特定多数の相手に呼びかけても意味がないからである。また、祈る主体も明らかでない。I のようでもあるし、we のようでもある。それに、この文を読まされる者が世界平和のためになにをしなければならないかも明らかにされていない。これは、「早く春になりますように」といった時候変わりの挨拶文のようなもので、われわれ自身ではどうにもできないことだが、なんとかそうなりますようにといった願いにすぎない。

だがこれを英訳すると、どうなるだろうか。これは祈願文であるから仮定法現在を使って、

The world be in peace!

となる。こうなると、祈る相手は明らかに天地を創造し世界を動かしている神である。祈る主体は I である。祈りは真剣であればあるほど個人的なものになる。神と祈禱者の間に真摯な内密な信頼関係があって、初めて祈りが成り立つからである。

ウィリアム・サマセット・モームの小説『人間の絆』の主人公フィリップ・ケアリは、自分が生まれつき今でいう O 脚なのを苦にして、休暇が終わって学校に戻るまでにこれを治してくださいと真剣に神に祈りつづける。だが、もちろん治らない。フィリップはその日以来、神

を信じなくなる。

祈りはあくまで個人的な心の中だけのものである。だがそうだとすると、祈りを街頭で公開するのは、その祈りの真摯さをみずから否定することではかない。それにこの文を読まされても、世界平和のためになにをせよと言っているわけではない。街頭を行く人たちに本当に訴えたいなら、世界平和のために軍縮せよ(reduce armament)とか、アパルトヘイトをやめよ(cease segregation)とか、われわれの運動に参加せよ(join our movement)など、具体的な行動を訴えねば効果があるはずがない。The world be in peace! というような標語を街頭に貼って何の意味があるのか、英語国人にはいぶかしいだけにちがいない。

それに The world be in peace. という仮定法現在の文を直説法の文に直すと、

The world shall be in peace.

The world will be in peace.

のふたつになる。すると、shall「～でなければならぬ」の場合は、「世界は平和なるべし」と神の命令になる。will(～したい)の場合は、「世界は平和であるだろう」と単純未来の文になる。だが仮定法の推測節の項で見たように、単純未来の文は仮定法になることができない。そうすると、The world be in peace. は、われわれの祈願というより神の命令の言葉ということになる。

事実、神の命令ないし予言者の予言と解すれば、The

world be in peace. は論理的に納得できる表現になる。だがわれわれの祈願や訴えと解しては、The world be in peace. は論理的に十全な表現にはなれそうにない。

「世界人類が平和でありますように」という標語を見るたびに、私はついそういうことを考えざるをえなかった。それは結局われわれ日本人は事象はつねに自然に、水の流れるように生成するものだと考えがちなのに対して、英語国人は事象には常に原因があり、そのせいで生成すると考えているからなのである。英語国人にとっては、あらゆる事象がなにかのせいなのである。

非人称代名詞の項で見たように、「部屋のなかは暗かった」は英語では It was dark in the room. だった。また感情の表現は日本語では「喜ぶ」「悲しむ」というように自動詞であるが、英語では be delighted, be grieved と受動態で表わされる。もう少し例を紹介すると、「失望する」「落胆する」(be disappointed, be discouraged), 「興奮する」(be excited), 「驚く」(be surprised, be astonished)などのように。日本語では感情は自然に生まれるが、英語では感情はかならず原因、理由があって生じるのである。英語ではあらゆる事象が、なにかが動き、変化しているためか、なにかがなにかを動かし、変化させているために起きているのである。

英語の動詞は簡明　そこで動詞が英語の表現では核となるのだが、英語の動詞の用法そのものはたいへん簡明

である。例えば、次のような英文が考えられる。

Only frogs swim in the pond. (その池には蛙だけが泳い〔住ん〕でいる)(状態)

Frogs swim as my steps approach. (私の足音が近づくと蛙が逃げる)(動作)

Frogs swim. (蛙は泳ぐものである)(性質)

このように日本語に直すと状態、動作、性質と表現が変わるのに、英語ではすべて Frogs swim. ですんでしまう。時間が現在のこととさえあれば、英語の動詞を現在形にすればいいのである。

また「食う」という動詞を日本語で表わすと、「食う」「食らう」「食べる」「食する」、あるいは「いただく」「ぱくつく」「かきこむ」などといろいろな表現があるが、英語ではどの場合も eat ですんでしまう。それに dinner も lunch も meat も fruit も soup も eat ですんでしまう。日本語で「帰る」ということを伝えようとする時、「帰る」「失礼する」「暇乞いする」といった言葉から効果を考えて選ぶことになるが、英語ではつねに leave でいい。

英語は動詞を活用するチャンネルが日本語よりはるかに多いが、動詞の選択そのものは日本語よりはるかに簡単なのである。

動詞の型 英語の動詞の用法が簡明であるということは同時に意味が単純であるということだが、英語の動詞はまたその性質によって簡明にいくつかの型に分類され

ている。事象はすべてなにかのせいであるということは、動詞にはつねに主語があるということであるが、英語の動詞はその主語との関係で簡明に分類されるのである。つまり、動詞(verb)が主語(subject)の状態や動作を表現するにとどまっているか、すなわち、主語と動詞だけで意味が完結しているか、それとも、動詞が主語の他者への働きかけを表現しているか、すなわち、目的語(object)がなければ動詞の意味が完結しないか、要するに自動詞かそれとも他動詞か、で分類されるのである。もっとも自動詞の場合も他動詞の場合もさらになにか言葉を補わねば完結しない、つまり、名詞や形容詞を補語(complement)として補わねばならない場合もある。こうして分類される動詞の型が、要するに、英語の基本文型と呼ばれるものである。

基本文型は次の5つからなる。

(I)第1文型(完全自動詞)

主語+動詞(S+V)

A store stands. (1軒の店がある)

(II)第2文型(不完全自動詞)

主語+動詞+補語(S+V+C)

The store is convenient. (その店は便利だ)

(III)第3文型(完全他動詞)

主語+動詞+目的語(S+V+O)

George runs the store. (ジョージがその店を経営している)

(Ⅳ)第4文型(完全他動詞)

主語＋動詞＋間接目的語＋直接目的語(S＋V＋O＋O)

The store offers customers commodities. (その店は客に商品を提供する)

(Ⅴ)第5文型(不完全他動詞)

主語＋動詞＋目的語＋補語(S＋V＋O＋C)

Shopping makes them happy. (買いものをするのは彼らを幸福にする)

このように英語の基本文型といわれるものは、動詞の基本的な型である。

これにたいして、日本語の基本文型は、手もとの中学校の教科書では次の4つになっている。

(Ⅰ)第1文型

なに[だれ]がどうする(動作)。

「虫が鳴く」

(Ⅱ)第2文型

なに[だれ]がどうなんだ(状態)。

「水が冷たい」

(Ⅲ)第3文型

なに[だれ]がなんだ(説明)。

「あれがパンダだ」

(Ⅳ)第4文型

なに[だれ]がある[ない・いる](存在)。

「本がある」「金がない」

これを見ると、日本語には自動詞、他動詞の観念がないことが分かる。英語の他動詞は日本語の第1文型に属するわけだが、日本語ではおそらく他動詞と自動詞はあまり変わらないのである。たとえば、「風邪をひく」「町を通る」「ものを粗末にする」というような場合、英語では他動詞が用いられても、日本語ではそれぞれが全体でひとつの自動詞のように感じられているのだろう。日本語の文型では、なにを、だれを、という目的語がまったく考慮されていないのがその証拠である。日本語では目的語は独立した存在というより動詞の一部なのであり、そのため、目的語もふくめた動詞がひとつの動詞のように感じられるのである。そして第2、第3、第4文型は自動詞である。日本語の動詞は大半が自動詞なのである。いや、日本語の動詞はすべて自動詞的なのである。

それにたいして英語の基本文型は、第3、第4、第5文型が他動詞である。それに本来第1、第2文型に属する自動詞にも、後で触れることになるが、だいたい他動詞の意味がある。英語の動詞は、大半が他動詞なのである。いや、日本語の動詞との対比で言えば、英語の動詞ぜんたいが他動詞的なのである。

英語の核は動詞であると前に言ったが、その延長で言えば、英語は他動詞の言語なのである。

英訳は他動詞で そう考えると、日本語の動詞は自動詞的であるから、「世界人類が平和でありますように」と

という言葉に現われているように、われわれ日本人は発想も表現も自動詞的である。それにたいして、英語国人は発想も表現も他動詞的ということになる。そしてそれはまた、上巻で見た「日本語は求心的で静的で、英語は遠心的で動的である」ということのもうひとつの説明でもある。

そこで、このことからわれわれが心しておかねばならないのは、われわれは思考そのものが自動詞的であるから、英語で表現したり、日本語を英訳したりするときは、できるだけ他動詞で発想し、他動詞で表現せねばならぬということになる。事実、日本文を英訳するときは、他動詞を使うことを心がければ、容易であるし、簡潔な表現になる。たとえば、

「彼が会長に選ばれることはあるまい」

これを日本文に忠実に英訳しようとするとう意外に難しいと思うが、他動詞を使うと簡単である。

I don't think they will elect him president.

次の文も自動詞的な表現であるが、他動詞で訳さないと、容易でないことになる。

「この地方一帯はもうすぐ冬になるだろう」

This district will have winter soon.

「いまできるところだから、ぼくの手料理のカレーライスを食べていつてくれたまえ」

Stay and eat curried rice, as I am making it now.

手もとの本にこんな文がある。

明治時代にはこんな説が行なわれていた。「日本には先住民としてアイヌが住んでいた。それを後から来た民族が追いはらって日本の国を作ったのだ。」これはシーボルト父子が述べて、人類学の先達、小金井良精博士も支持された説である。もしこれが正しいければ、アイヌと日本人との関係や、アイヌ語と日本語との関係はどんなものか。それをくわしく考えてみなければならないだろう。

(大野晋『日本語の起源』)

この冒頭の文を英訳するのに、「こんな説が行なわれていた」を日本語に忠実に訳そうとしたりすると難しくなる。それに、日本語と英語は本質的に違っているから、日本語に忠実に訳すと、英語国人には分からなくなることが多いはずで、むしろ、われわれは英語に忠実に英訳せねばならない。この文もできるだけ他動詞で訳そうとすると、それほど難しいわけではない。一例をあげておくと、

The Meiji era had a theory: "The Ainu race inhabited the Japanese islands in ancient times. Then another race came, drove them away and made Japan." The Siebolds, father and son, expressed it and Dr. Yoshikiyo Koganei, founder of anthropology in Japan, also supported it. If this theory is true, how are the Ainu race and the

Japanese connected, or the Ainu language and Japanese? We will have to scrutinize this.

日本文の細部にこだわらずに、大意をとって、他動詞で表現するのが、英訳のコツなのである。

自動詞・他動詞 そこで、英語に馴れるには、われわれは他動詞でものごとを考える練習をしなければならないことになる。だが、英語の動詞はほとんどが自動詞と他動詞の意味を持っている。そこで、自動詞の意味から他動詞の意味を推測し、他動詞の意味から自動詞の意味を推測する訓練も必要なわけである。それに本来自動詞であるものが他動詞に使われたり、本来他動詞であるものが自動詞に使われたりすると、たいへん簡潔な表現になることが多い。ただ、われわれ日本人には、それらはなかなか使いにくい。そこで、参考のため、そうした面白い例を少しあげておく。

本来の自動詞が他動詞として使われている例。

fail「失敗する」

→ Words failed me. (言葉が出なかった)

→ His courage failed him. (いざというとき、彼の勇気が出なかった)

fail は、他動詞になると abandon「見捨てる」とか disappoint「失望させる」の意味になる。

stand「立つ」「立っている」